

終了時 子供の視点で授業を振り返る

1年生の「長さくらべ」の授業が終わり近くなった。

「今日は、長さくらべをしました。長く切った新聞紙で比べましたね。一番長かったのは4班でしたけれど、どの班もよく協力して学習できました。それではみんな、一口感想を書いてください。」

子供たちは小さな紙に授業の感想を書き始めた。子供たちの書いている様子を見ると

Uさん：「しんぶんしをきって、くらべたのがたのしかった。」

Vさん：「また、はんでやりたいです。」

Wさん：「とちゅうでしんぶんしがきれたのが、くやしかった。」

Xさん：「Yちゃんのやりかたが、いちばんうまくいきました。」

など様々であった。

担任は、授業中、Yさんのやり方を取り上げることができなかったのに気づき、次の時間はぜひみんなの前で取り上げて、工夫した点をほめてあげようと思った。



授業終了時、学習したことを子供の視点で生かしてまとめると、子供自身の自己理解を深めると同時に、教師の授業評価につながる効果があります。

学習した内容を自己評価させる

事例では、一口感想を用いて、子供一人一人が授業で何に気付き、どんな感想をもったかを書かせています。話したり、書いたりする作業は、自分の思いをより明確にし、意識化させます。それは、自分がどんなことに興味・関心をもっているかなど、自己理解を深めるのにつながります。

この外に、その時間の授業に関する子供の感想を言う時間を5分くらいとるとか、評価の観点を示した用紙を準備して子供自身が自己評価するなど、発達段階に応じた工夫が必要です。

子供の視点を次の授業に生かす

授業展開において、時として、子供は教師が予測しなかった受け止め方で授業を聞いたり、興味・関心を示したりします。予想外の反応は上記のような工夫を取り入れることによって把握することができます。

教師が気付かなかったことの指摘は、謙虚に受け止めることが大切です。そのことは、教師自身の自己理解にもつながります。

そして、気付かなかった子供の視点を次の授業に生かすことができます。「Xさんは感想の中で、Yさんの工夫をほめていましたよ。みんなに、Yさんの工夫ってどんなだったのか、教えてもらいましょう。」などと取り入れていくと、学習者主体の授業となり、子供の授業への参加意識も高まります。